



全国高校NIE研究会

第10回 研究発表全国大会

話を聞くコツ 記者から学ぶ



東日本大震災報道について討論する新聞記者ら



「日生カキオコ」について、何を取材すればいいか考える参加者(どちらも3月24日、山陽新聞社で)

新聞を活用した授業法などを考える「全国高校NIE研究会」の第10回研究発表全国大会が3月24、25日の両日、岡山市北区の山陽新聞社で行われ、全国から参加した高校教員ら約200人が、生き生きとした授業実践に聞き入った。

今大会のテーマは「NIEでのばす学ぶ力——新しいステージへ」。初日に「東日本大震災を取材して」と題して行われたパネルディスカッションでは、読売・朝日・毎日新聞各社の3記者が、この1年で被災地を取材した時の様子や、考えたことを思い思いに話した。

読売新聞大阪本社社会部記者の羽尻拓史記者が、グーグルでの安否情報入力など、広がるボランティア活動について触れ、「今でもできるボランティアを紹介していきたい」と述べた。震災直後、インターネット上で根拠のないうわさが飛び交ったことなども話題にのぼり、「生徒らに情報を見分ける能力を身につけさせてほしい」との声も上がった。

パネルディスカッションに先立ち、県立岡山城東高校の畝岡睦実教諭が「新聞記者に挑戦」と題して模擬授業を実施。生徒役になった参加者が、岡山のB級グルメ「日生カキオコ」の生みの親・江端恭臣さんへ実際にインタビューし、記者を体験。その後、読売新聞大阪本社の滝沢清明・大津支局長がお手本として江端さんに取材して見せ、さらにインタビューのコツを参加者にアドバイスした。

2日目は、新聞を活用した授業実践例などが発表された。県立和気閑谷高校の田辺大蔵教諭は、刻々と変わる原子力発電情勢について、新聞を

使った情報収集などの授業例を発表。高校物理・化学の教科書が、主に18世紀から19世紀の内容であることなどにも触れ、「新聞を使って今を知る必要性がある」などとまとめた。

京都学園中学高校の伊吹侑希子教諭は、震災後の現代と比較される中世の随筆「方丈記」の時代を、「もし自分が当時、生きていて新聞を作ったら」と仮定した授業実践を発表。「都で大地震発生」「予期せぬ大震災」などの見出しや、「物資交換所」の広告など、当時の人の気持ちを思い描いた新聞を生徒たちが次々と作り上げた例を示しながら「大変だったが、多くの生徒が楽しみながら、作品への理解を深めていた」と話していた。



京都学園高校2年生が方丈記の時代をまとめた新聞